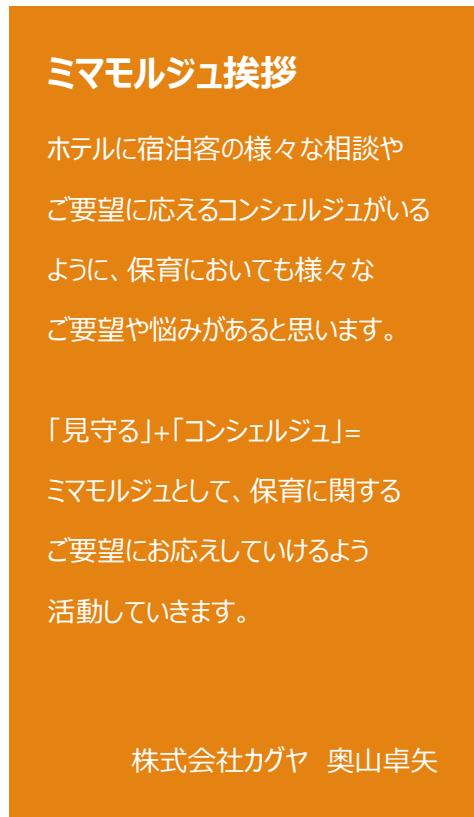


2019年度GTセミナー 第50回保育環境セミナー 2019.7.8～7.10 前編

第124号 2019年7月15日発行



第50回保育環境セミナー

2019年7月8日～9日に第50回保育環境セミナーが東京都中央区のコングレススクエア日本橋にて開催しました。

全国から150名程の先生方が集まり、藤森代表の講演や実践発表、園見学等3日間に渡り行いました。

1日目 2019年7月8日(月)

- 10:00～ 園見学
- 13:30～ 見学園紹介
- 15:00～ GT活動報告
- 15:00～ 休憩
- 15:30～ 講演
- 17:15～ 意見交換会

2日目 2019年7月9日(火)

- 9:00～ 実践園報告
- 9:30～ 見守る保育の5つのポイント
- 11:45～ ミマモリングソフト紹介
- 12:00～ 昼食
- 13:00～ ドイツ報告
- 14:00～ Q&A
- 15:30 終了

3日目 2019年7月10日(水)

- 10:00～ 園見学



第50回保育環境セミナー 基調講演『見守る保育の考え方』

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

—はじめに—

皆さんこんにちは。今話があったように、ドイツへ行って時差ボケがないのではなくて、年を取ると毎日が時差ボケです（笑）。不思議ですよね、夜が寝れなくて、昼が眠くなる。TVを観ていると眠くなり、30分でも寝てしまうと夜が寝れなくなってしまう。逆にドイツへ行っても気にならない。歳をとって変わってくるのは仕方ない。寝れなくなると、朝まで仕事が出来る。寝れないと心配していると、きりがないと。歳を取ることも楽しいと思うしかない

—変化の時代—

ベストセラーを出した人が言っていたが、これからは変化の時代。そうすると、その変化に抵抗するのではなく、前向きに捉えて自分の行動を変えていく。変化を楽しむことを言っている。年を取って嫌だと思うより、有難いね、色々なことが出来るようになった。歳のせいか分からないが、昨日会った人も忘れてしまう。人のことを忘れるではなくて、毎日が新鮮な感じがする。時代が変わることに対して、前向きに楽しむべき。時代がどうだ、こうだと嘆いても仕方ない。歳をとるなりにいい反面、子どもを相手にしていると、若い人の感覚も身につけないといけないと思う。私は園の中で、若い男性職員と勉強会をしているが、その差が広がりショックを感じることがあった。一人がTVを観ながら歌を歌ってたるので、「この歌、知っているの？」と聞いたら、「懐メロを歌える」といって、その年平成11年だった。それが懐メロなのだとびっくりした。聞くと、当時3歳の時の歌、と言っていたが、時代が変わる中で、私たちは変わらないといけないことと、変わってはいけないこともあると思う。子どもたちの発達や成長は変えてはいけない。時代がどうなっても変えてはいけない。それを守るために、私たちが変えないといけことがある。その中で、日本人は変えることに抵抗をする。特に、教育界はなかなか変えられない。例えば、大阪では未だに組体操をやっている園が多いと言われる。組体操は軍事教練で、危険も多いし、世界はそれを今やめようと言っているが、日本だけはやっていると言って、ユネスコから指摘をされた。何で、いつまでしているのかと言われるが、日本の中では、必要だという人達がいます。保護者にもいます。体罰に対しても反対する人が多い。ある程度、子どもには必要だ、という人も中にはいます。ということがあって、保育界でも、どうしても「指導する」という言葉を使いたがる人がいる。私は、「指導」という言葉は幼児教育で反対だが、指針の中にも指導計画を立てるということが書かれていて、私はおかしいと思うが、指導計画を立てろと言っている。ドイツ報告をブログで少し書いているが、今回いつもと違って、ドイツから学ぶといっても、毎回同じなので、自分の所を見直そうと、今回1つが書類についてドイツはどうなっているのかと思った。私と全く違う観点だった。1つは去年、プライバシー個人情報保護法が書き加えられて書かれた。子どもの情報を他の人に言ってはいけない。伝えてはいけない。子どもの情報は、保護者が持っているものなので、伝えてはいけない。要録のような情報を学校に勝手に伝えてはいけない。児童表やお便り帳で子どもの姿を書いてはいけない。プライバシーから出していることを初めて知った。園だよりも、子どもの姿を書いてはいけない。親の承諾を得ればいけないことはないが、羨ましいのは要録も児童票もないし、お便り帳も指導計画もないし、そういうことを書くことはないのでいいなと思うが、日本は今のところそうではなく、昔の考え方をするので変えるのが難しい。

—見守るとは—

まず観点を絞りたい。見守るという言葉。私が「見守る保育」と提案したことはない。ですけど、同じ提案をしている人が「見守る保育」と言う言葉を遣っているが、思いがけず海外で展開するときにこの言葉が評価される。日本の精神を表していると言われる。日本だと、どこまで手を出して、見ているかと言われるが、海外では相手を尊敬して、相手に対しての対応するやり方ということで、「ミマ」とか「見守るアプローチ」という言い方をする。私がもう一度整理して、何を見守り、どうして見守る必要があるのか。どこまで手を出すかの議論ではなくて、なぜ今、見守らないといけないかを整理して話す。まず3つを知って欲しい。

—見守る観点① 脳機能から見た子ども像—

まず一つ脳科学から見た子ども像。二つ大きくあります。私たちは考えたり、感じたりするのは脳が司っています。心臓ではない。心も脳の中にはあります。神経細胞と言われるニューロンやシナプスがある。時代によって、昔は右脳や左脳、前頭葉と言われているが、保育に大きく関係するのが2つある。1つは脳のニューロン・シナプスの数が増えていく。所謂成長ということ。ニューロンは神経細胞だが、シナプスはニューロンを繋ぐ回路です。回路が複雑になるにしたがって、複雑な行動や話せるようになる。子どもが経験をする、刺激受けることで、シナプスが増えていく。最初は、シナプスは回路が無かったことに対して、大人が刺激したり、色々と教えるとその回路が増えてくる、所謂、赤ちゃんは白紙で生まれ、そこに絵を描いていくことが育児と思われていたが、今は否定されています。シナプスが増えていくのではなくて、生まれてから1歳から3歳、特に1歳前後がピークで、その後は徐々に減らしていくと分かってきている。白紙に絵を描いていくのが育児ではなくて、順に減らしていくことが育児である。それを20年前に発見されて、それ以前の保育カリキュラムは、子ども観が素晴らしいが、実は白紙論で出来ている。子どもは、大人が指導しないといけないということが根底にある。子どもは主体的とか、自発的ということが共通しているにもかかわらず、保育方法になると指導が出てしまう。子どもは、大人が指導しないといけない。一度、指導ということを定義づけた。指導は、保育者が頭の中で考えた通りに、子どもを導くことと定義づけた。それに対して援助は、子どもの自発的な活動を保育者が繋ぎ合わせ、発展させることと定義づけた。「子どもの生活と遊びに関する指導」という言葉は、援助に変わった。これは白紙論が否定され、子どもは白紙で生まれるのではなく、援助に変わった。そうすると色々なことが変わります。上手に減らすのは何ですか。いっぱい回路を作ります。必要なものも含めて、いっぱい小径を作ります。いらないものも作ります。いらない道は減らして、必要な道をより太くしていくのが育児で、保育です。何をいるか、いらないかを決めるのは赤ちゃん自信で、何が必要で、いらないかを選択していると言われています。一時期有名になったのが発音の違いで、英語で言うとLとRの発音が違います。私なんかは聞き取れない。世界中の赤ちゃんが区別が出来るそうです。赤ちゃんはどこで生まれて育つか、どんな障害を持つか分からぬから色々な道をつくる。日本に住むとなる、特別いりません。日本に住んでいると区別する小径はなくし、そのかわり、ラ行を太くする。反対にアメリカの子たちは区別をしないといけないので、区別をするというシナプスを太くする。韓国にも同じような発音があり、その区別を残していらないものを削っていきます。一時期有名になったのが、人の顔とサルの顔の区別は、どの国の赤ちゃんでも猿とヒトの顔の区別を同じようにできるらしい。ただ、次第に猿の顔の区別は削って、人の区別をするようになります。自分が生きていく上で必要かで選んでいます。大人が子どものためだと思ってやってあげると、赤ちゃんはいらない能力だと思って削ってしまう。歩く能力を持っているが、赤ちゃんのためと抱っこしていると、歩く力を削ってしまう。いつまでも抱っこする民族がいるが、その国では3歳まで歩かない。それは仕方ないが、日本でも赤ちゃんのためだと持つて、抱っこしていると歩くのが遅くなる

か、歩かなくなる。よく言われるのが、自分の食べる量。母乳をどれくらい飲んだかは分からぬ。自分の必要な量、飲んでいるから、決められる能力を持っている、哺乳瓶だと目に見えるので、もっと欲しいといつても、これで終わりというと、自分で量を決める能力を捨てて、与えられて飲むという能力を残してしまう、見守るは、下手に手を出さないこと。先回ってやらないということです。なので、見守る必要があります。「見守る」は、見ていて必要なことは守らないといけない。指針に出てくる応答性、見守る観点は、言われもしないことはしない。先回ってやらないことです。それは必要な能力を削ってしまう。本当は昔、人類は地面を歩くときに、砂利や木が合って、それを防ぐ能力を持っていた。危ないからと言って、平らにしてしまうと超える能力を失くしてしまうと、ちょっとした出っ張りでも躓いてしまう。もともと持っていることをやってしまうと、削ってしまうので見守ることが必要です。それからもう一つ大事なことは、上手にバランスよく削っていくが、これを上手に削れず、ある部分だけ残ってしまって、それを残すために、ある部分を減らすことを今は発達障害と言われている。昔は発達障害は、ニューロン・シナプスが出来てこない子と、言われていたことがある。現在はそうではなくて、上手に、バランスよく削れず、偏りが激しい子。バランスが激しい子が発達障害と言われている。日本は極端になくなっているものをあげようとする。例えば、お集りに来ない子を行かせるようにしようとか、海外では特にヨーロッパでは、残っている所を伸ばそうとする。人類にとって必要なことだから逆を言えば、極端に残ってしまうので天才。ギフデット（贈り物）をもらった人たち。障害を持っている子は、ブロックに執着してやっていたら、無理にお集りに来させず、十分にブロックをした方が、世の中に活かせる人になる可能性がある。この場合は、発達障害の場合です。理系の大学教授や発明家は発達障害と言われ天才。有名なのがエジソン。発達障害はダメな子ではなく、偏りの激しい子。私たちは考えを変えないといけない。劣っている、出来ないではなくて、偏りが激しい子。それ自体は世の中に必要なのが、後天的に人为的に発達障害を起こすことがある。上手にバランスよく減らしていくかといけない時期に、過度な刺激を与えすぎる場合、過干渉や早期教育は、それ自身の発達は進むが、それが障害のような症状を示します。4、5歳になるとADHDの症状を示すと言われています。過度な刺激を与えると、小さい頃に減らすときに早期教育をすると、少子社会になってきて、親が手を掛けてしまいます。それから色々しようとします。最近、4、5歳に気になる子が急増しています。気になる子の原因は、乳児保育にあると言われています。その時に、手を掛け過ぎてしまっている。今のADHDは今の研究によると、小学校に入ると、学習障害と情緒障害を併発し、高学年に不登校になるのが6割くらいと言われている。小さいうちに干渉しすぎることが原因の一つと言われている。最近、色々な事件が起きている。お父さんが思い余って、子どもを刺したり、引きこもっている若者は学歴的には高く、母親が教育熱心ぽいことがあって、学力は高くなる。しかし、それらが発達障害、不登校、引きこもりに繋がっていると懸念されている。これも白紙論が否定されてから言われ始めている。上手にバランスよく減らしていく。専門用語では過形成というが、刈込みと言って、上手に減らしていくことが私たちの仕事です。上手に刈り込むには、子どもが選択することが基本だと言われています。見守ることが、私からすれば、白紙論が否定された大人との関わりが、見守るというのが一つ目です。脳機能が拡大していく、これをセンシティビティ（感受性）というのが発達です。色々な場所の発達が違っているが、脳機能の殆どは3歳未満でピークになります。乳児保育が脳機能の拡大に大きく影響しています。アメリカでは、4歳半で小学校へ入るが、就学前4歳半以前に脳機能の、ほとんどが決まってしまうといわれている。脳機能は、一つは今後の人生・健康にも影響するといわれている。小学校での学力が3歳未満でピークを迎えます。研究では、脳が拡大するには、質の高い保育が大きくしていると言われている。どういう保育が質が高いかを、アメリカやイギリスで研究されている。一つは、保育者との子どもの関わりに特徴が見えた。その関わりの特徴の一つは、保育者が子どもへ温かく・応答的である場合。温かい方が、脳機能が拡大します。子どもがゆったり、

安心しないと脳機能は拡大しません。応答的は、大人からこうしなさい、これはどうではなく、子どもが訴えて来たときに応える保育をすると、脳機能が拡大します。2つ目が、子どもから聞かれたときに答えるのではなく、共に考え、深め続ける関わりが脳機能を拡大すると言われています。子どもが訴えて来たときに応える。質問したら、一緒に考えると脳機能が拡大すると言われている。そういう園は、子ども主導の遊びが多い園。先生がああしなさいではなくて、子ども主導で、保育者は繋ぎ発展させていく。子どもの発想を発展していくのが、流行りの言葉で言うとプロジェクト保育です。その名前はどっちでもいいが、先生が発展させていく役目。子ども主導で、子ども主体の遊びがあって、先生は繋げて発展させていく。こういう保育をしているところが、脳機能が拡大すると言われている。研究では分かっているが、もう一つ研究ではないが、もう1つ条件あると思っている。それは、子ども同士が関わることで、脳機能が拡大すると思っている。例えば、9ヶ月から1歳半の頃にピークに達するのが、エモーショナルコントロールという自分の感情をコントロールする力が、9ヶ月から1歳半がピークになります。人類は、その頃から共同保育をしてきたからです。その時9ヶ月頃、トマセロという人が発見したが、9ヶ月革命と言って、赤ちゃんは意図を持った人として、認識し始めます。実はこの頃に、集団共同保育がされ始める。自分が我慢すること、感情をコントロールすることが出来ます。ヒヤリングやビジョンも色々な人の顔を見ることで、他者を認識したり、他者に共感する力を持つようになり、研究されていないので、そういうことがあまり提案されていないが、現場からすると、脳機能が拡大する。ということで、大人が子どもに何かしてあげるとか、子どもに刺激をすることは、脳にもあまりいい影響を与えていません。それから、数の拡大が発達と成長と言われているが、この2つから脳科学を考えると、乳児から、大人が何かしてあげよう、教えようではなくて、赤ちゃんがやることを優先し、こちらは見守っていて、必要な時に守る用意をしていくことが大事だと、脳機能の拡大から分かって来たことです。赤ちゃん自信が身につけていくので、大人は援助する形で見守る。

—見守る観点② 子ども同士の関わり—

二つ目の理由は、子どもの集団、子ども同士の関わりからです。今までの保育は、大人と子どもの関係のことを論じていた、大人が子どもに何をしたらいいかが語られてきたが、大人の関わりよりも、子ども同士の関わりが重要ではないかという説が出てきた。これを急先鋒のハリスという人が、集団社会科理論というものを出した。ボルビーの愛着という関係が多くを占めています。大人が子どもの相手をしてあげる。特に母親が重要と言われてきました。これは愛着という考え方だが、ルーマニアで、世界大戦の後に親を失った子たちは孤児院に入りました。その孤児院では、十分な栄養と衛生的な環境、そして食事を提供しましたが、愛着障害のようなことを起こす子が出た。政府は何が原因かを研究した結果、どんなに栄養や衛生があっても、母親という存在が子どもにとって必要である、という考え方を示した。それを受けて、あらゆる政策が作られた。保育界で言えば、担当制。施設よりも里親、虐待した親でも親に返すとか、親信仰が強くなった。実は、それに対してハリスは疑問を持った。これが集団社会化理論です。それは親を失った子どもたちが孤児院に入り、出た後に障害を起こす子たちと、支障なく立派に社会で活躍する子たち2種類あった。片方の子どもたちは何も問題なく過ごし、どこが問題があったのか。調べた結果わかったのが、立派になった子たちは、孤児院の間に子ども集団を形成してきた子たちと分かった。親がいるかではなく、子ども集団があったかどうかと分かった。これは孤児院というのは、ある過程で引き取られたり、別々に生きるので、孤児院は子どものためだと思って、あまり子ども集団を作らない、仲良くさせないところも多いそうで、たまに共同保育をしている園でも、シャッフルをして、あまり仲良くしていなかったことが行われていたことが障害を起こしていた。そうではなくて、子ども集団の中で、子ども同士が関わった子たちは、社会に出た後に立派に生きてきたと分かっ

て、極端な結論を出した。ハリスはどんないい母親でも、子ども集団、仲間集団の代わりは出来ない。しかし、仲間集団は時として、母親の代わりも出来るということを出した。不安な時、それを支えてくれるのが愛着という考え方です。この存在は子どもに必要です。これを母親に求めます。しかし、母親がいない子たちは、仲間集団にそれを求めます。孤児院の子は母親がいないが、仲間集団がないと問題を起こしてしまう。仲間集団がないと、物に求めると言われています。その物を擬人化して、そこに愛着を求めるといわれています。スヌーピーのライナスが持っている毛布や、若者のスマホ依存など、擬人化したものに愛着を求めるといわれています。一緒に遊ぶ過ごすことが愛着ではなくて、子どもが負の状況に陥ることがあるので、その時に支えてくれる存在を持ちます。一番は母親だけど、そうでなければ友だち、仲間・物を持つと言われています。子ども集団からの学びは、例えば見て真似るとか、負けずにやろうとか、子ども同士の成長は、かつては家族の中の兄弟で行われていた。それから、地域の中に子ども集団がありました。ガキ大将がいて、子ども集団の中で遊んでいました。昔は、親と子どもが遊ぶことはなかった。親は大人の仕事があり、子ども同士で遊んでいた。子どもの中で学んでいた智慧が、今は行われなくなってしまった。兄弟は少ない、地域で遊ぶことも少ない。そうすると、子ども同士で学べるところは保育園しかない。この保育園は働いていないと入れない。ということで、その子ども同士の関わりが欠けている場合に、社会に出るとドロップアウトする若者が増えてきている。人といることにストレスを感じてしまう。特に異年齢の人ということで、何を話していいか分からぬ若者が職場からドロップアウトしている。保育園をやめていく保育者の多くは、人間関係で辞めています。人間関係の中で言われているいじめやセクハラも問題だが、昔は兄弟の中でいっぱい経験してきた。上から強く言われることがあったり、ガキ大将から言われ経験してきたが、親との関係だけだったら、そんな経験がない。社会に出ると、全て人に関わらないといけない仕事が増えてきている。当然、苦手、ストレスを感じて引きこもりが増えたり、無業者率（働かない人）も増えています。新宿は、外国人が多いが7人に1人と言われている。しかし、今年の新宿で行われた成人式の半分は外国人だったそうです。それは、外国人が多いだけでなく、日本の若者たちは、人同士の中に出たくない。人の集団に出ることをしないで、家の中で好きな人同士で盛り上がることをする。知らない人の所には出ない。保育園の職場でも、同期の人は群れて騒いだりするが、異年齢とは中々触れ合わなくなっています。家庭にも異年齢はいないし、地域でも遊ばないと、社会に出てからも同期の繋がりが強い。うちの職員も同期で飲みに行くことは多いが、園全体で行くと気を遣うとか、ストレスといかなくなる。いつも同期だけが一緒。そんなことやっていたら、世の中では生きていけない。こういうことが経験されません。私が提案している保育が中国で広がりつつあるが、それは一人っ子政策の影響が出ているからです。一人っ子政策で育った子は、知恵もついていい大学も出ます。ただ、社会に出たときにドロップアウトしてしまいます。人と関わる力が欠けてきている。ですから、私たちは大人との関係よりも、子ども同士の関係をどう作っていけるか、子ども同士の中でどう学んでいるか。子ども同士の中で育ち合っているかを環境として意図として、考えないといけない、保育計画の中にそれが薄い。先生が何をするかの指導計画が多くて、子どもがどうするかがない。これは実は研究がされていないからです。アメリカでこういうことが起きた。あるインコがいて絶滅しないように育てた結果、ほとんど死んでしまった。集団で生きているものなのに、飼育を一羽ずつ箱に入れて育てた。自然に戻すと生きていけない。ハーバードという夫妻がサルの研究をした。とてもやさしい母親が子育てをします。ある年齢になったら猿の檻に入れると、他の猿と関われなくて社会不適合者ではないが、仲間の中で自分を発揮できなくなるという研究もされている。同じように、人類も集団の中で生きていかないといけない生き物です。ということなので、ピアジェが発達心理学を保育に取り入れたことは偉大なことではありますが、心理学は子どもの個人の発達の研究で、個人の発達です。ハリスが初めてハーバード大学で疑問を持ったことです。その頃、スキナー派という大学の研究者がいて、学生がハトはどう

餌を食べるかの研究をしていて、巣箱に入れてスイッチを置いて、スイッチをついたらトウモロコシをあげる実験をしていた。報酬を求めて、ある行動を起こすと結論付けた。ハリスはそれに対して疑問を持ちます。ハトは自然界で集団で生きていますが、それを一羽ずつ巣箱に入れて、つき方を研究しても違うのではないか。集団で生きる生き物を、単体で研究しても違うのではないかと言った。そうしたら、ハーバード大学から追い出されます。大学の先生たちは、自分たちの研究を否定されることになってしまいます。ハリスは大学から追放され、家で研究をしています。それが皮肉にも、追い出した教授がいるが、追い出した教授を記念した賞があるが、それをハリスが受賞することになりましたが、当時は迫害にあります。人間は、社会に出たら集団で生きる生き物である。単体に研究しても違います。私が思っていることと同じですね。子どもの好き嫌いをどうするか。料理法を工夫したりするといっていたが、私たちは単体ではなく集団で食事をする。その集団の中の他の子が影響する。これはハリスが言っていたが、ある時、義理のお姉さんと赤ピーマンを収穫していて、甥っ子が「ちょうどいい！」と言ったのであげて口に入れた。姪も「ちょうどいい！」と言って口に入れた。そうしたら、お兄ちゃんが「口に合わないと、僕嫌い」と言って口から出すと、姪も「嫌い！」と言った。その後、親がいくら説得しようが、絶対口にしない。その姪っ子からすれば、親の説得よりも、一番大事なのはお兄ちゃんが好きかどうかを経験して、子どもの好き嫌いをなくすのは、大人が説得するより、それを好きだという子と、食べさせることだといっています。子どもは、他の子どもの影響を受けるということです。その研究の結果だが、子ども集団の中で育ちあいが、少子社会になってくると保育園しかないとと思っています。特に、乳児未満児においては保育園しかない。この研究がない分、私たちの役目が大きいと思っています。子ども集団が、子どもの発達にどう影響しているのか。子ども同士の中でどう、脳の拡大をしているのかの研究を提案をして、乳児からすべての子が、親が入れたいと思ったら、入れられる制度をつくるべきだと思っています。今は保育に欠ける子しか無理です。子ども園のように、働いていなくても入れる制度が出来ました。1号認定と言われている子たちです。これを私は是非、乳児まで拡大したいと思っています。保育園は、子どもの数が減っても、絶対必要な施設だと思っています。それに対して、今の日本は、育休制度を伸ばそうとしています。今は2歳まで伸びています。今は0歳をキャンセル人が増えてきています。これを最終的に3歳まで伸ばそうとして、親が大事だろうといっているが、実は大きな間違いで、0歳から子ども集団が必要です。ただし、今の制度のままだと、入るためにには働くこと、長く預けないといけない。本来は1号認定のように、4時間くらいでいいと思っています。育休を3歳まで伸ばして取っても、保育園に入れることができヨーロッパでもやっていることです。保育園に入れるかどうかは別問題で、1歳以上の親が入れたいと思ったら、すべて入れさせないといけない法律を作っています、子どもにとって、乳児から集団が必要。早くそうしないと、社会に出ない若者が増えてくると思います。社会に出るとドロップアウトしてしまうことが一つと、母親信仰が強いのに、虐待をしても親に返そうとします。しかし、現在の研究では早く母子分離を図り、いい養育者の方が子どもにとって幸せなんです。虐待が増えてくるのは、母親におんぶ、抱っこをさせようとする。共同保育をしていたのに、母親だけに背負わせると、どうしても虐待してしまう。虐待しても親に返す。ネグレクトな親が居ました。施設の人と話して、担当と話していたら何と言われたか、冷たいと言われた。「せっかく、お母さんが育てようとしているのに、施設に入れて冷たい」と言っていた。母親がちゃんと見るならいいが、そういう人は、「自分がみます！」と言うが、それで子どもが犠牲になったら、もっとかわいそう。親はもちろん大事です。大事ですが、そうでなくとも、子ども集団の代わりは出来ない。虐待をしたら、子どもを見てくれる養育者に代えなきゃいけない。集団社会科理論と言って、社会的ネットワークと言って、ボルビーのモノトロフィー、二者関係から三項関係や、集団理論に移りつつあります。大人対子どもではなくて、子ども同士の関係をどう作っていくか。ドイツでは、オープン保育が広がっています。オープン保育は、どこに

いても、どの先生のそばにいても、園内にいればすべて自由だが、今回行った園で、0から6歳の園でそれをしていた。どの子もどこにいてもいい。それは、0歳から良いということです。愛着理論はない。特定の人、という議論はない。だからと言って、色々な人がやるのではなくて、子どもが決める。赤ちゃんの場合は、やりたいことよりも、先生で選ぶといわれている。大きくなると、やりたいことで選ぶ。先生を決めるのも、いる中で決めます。日本の特定の愛着理論では、オープン保育は出来ない。愛着という言葉も出ない。日本だと、乳児保育だと愛着形成というが、愛着は、信頼関係を持った中で育てられないといけないと思っている。子ども、赤ちゃんは、優先順位を決めます。全体の中では母親がトップだが、いない時はこの先生と、園の先生の所に行くはずです。親以外に対する順応性があると言われています。「見守る」というのは、大人と子ども関係から、子ども同士の関係を、大人が見守るスタンスでいる。一つ目は手を出すか出さないか。二つ目は、子ども同士の関係を、先生が見守る必要があります。これは、0歳から必要で、一人遊び、子ども同士の遊びがにちろです。赤ちゃんが、大人を求めてきたら積極的に関わる、求めなかったら、一人遊びをしていたら、じっと見守っている。子ども同士が関わっていたら、危険がないかを見守る。大人対子どもの関係から、子ども同士の関係です。一番思ったきっかけが、4月のエデュカーレの汐見先生の原稿を見ていろいろ考えた。汐見先生のことは尊敬していますし、個人的に仲もいい。しかし、汐見先生が「見守ると言って流行っているが、見守るといつても問題ある。見守る保育をしている園に行った時に、子どもが木に上って泣いていた。それを先生が知らん顔をしていた。それは見守るではない」と書いていた。その時に最初に思ったのが、この園は、私が提案した見守る保育の園ではなく、別のグループの見守る保育だろう。私は応答的なことを言っているので、子どもが泣いて訴えたら、無視するわけがない。呼んだらいくべきだと思っています。惻隱の情と言って、そういうことは無視できなるはずがないと思ったが、それ以上に常に、頭の中で自問自答するのが、子どもが怖がって泣いていて、どんな発達をしたのか。先生が行ったら、その子は安心感を得ます。どんな発達をしたかは疑わしい。達成感もないし、昔、木登りはどういう状況でしたかというと、子ども同士で遊んでいた時に上っていた。大人は、そばにいなかったと思う。怖がって泣くと、上の子が下から励ますと思います。まずの上の子が励まして、手で下ろすことはできないので、降り方を教えると思います。「下に枝があるから、脚を掛けてご覧！」と言って、降りると思います。そうすると、降りれた子は恐怖に打ち克ち、助けた子は、援助できたと発達すると思います。泣いたから、すぐに下ろしていいのだろうかと思った。先生が手を出すかどうかの前に、子どもが助ける概念がない。「見守る」というと、先生が手を出すか、見ているかしかないが、二つしかない、そうではなく、子どもが助けるがない。どうも、最近子どもがおかしい。散らかっていて、「片しなさい」というと、俺がやっていないとか、自分でないことは知らん顔する。これはまずいと思う。子ども同士が助け合い、関わることで発達し合うことが必要だろう。去年、埼玉のプールで死亡事故が起きたときに、先生が見ていたかが議論になった。物を取りに行っている時に起きたことだが、その後に通達が出て、見張る人をつけなさいと来た。その時にとっさに思ったのは、先生が見ているかどうかもあるが、一緒に泳いでいた子どもは、どうしたのだろうと思った。大声を出すとか、助けようとしなかったのか。そのままにしていたのか、不思議に思った。先生がずっと見ていることはできない。他の子が、ちょっと危ないとか、言うわないと無理。昔は、子ども同士でいたはず。保育の中で、子ども同士の関係が抜ける。先生が手を出すか、出さないかなんです。子どもが手を出すという途中がないです。これを私はぜひ、「見守る保育」の中で提案したいことです、子ども同士で育ちあう、教え合うような子ども同士の育ち合い、一時期小学校の授業で流行りました。鹿児島では郷中教育と言って、子ども同士が教え合うことが有名だが、私はそういう子に育てていかなといけないと思っています。年長になったから、そうしなさいではなくて、0から育てないといけない。ゴミを片付ける時に、先生はつい「自分で使ったんだから、片付けなさい」と注意しちゃうが、「自分が使っていないのだから

ら、いいだろう」となる。そうではなく、「ここを綺麗にしよう!」、使っている、使っていないに限らない。「きれいな方が気持ちいいでしょ?」と言っていかないと、そういう子になっていかない。本人がしたかどうかで注意している。どうもヨーロッパっぽい、日本はそうではない。「きれいにすると気持ちいいでしょ?」、手が空いているのだったら、空いている人がすればいい。子どもは次に行ってしまっているのだから、片付けるのを連れ戻してさせるのではなく、先生がするか別の子とすればいい。子ども同士の関わりを積極的に意識した方がいい。大学の先生はあまり言わないが、保育者がどうすればいいかの話が多い。子ども同士がどうするか、その関係をどう作っていくかが大事。子ども同士が助け合って、教え合うのを大人が見守る。

—見守る観点③ A I 時代に子どもたちに身につけさせること—

3つ目はA I の時代になります。大人が子どもに指導することは、これからは機械が出来るようになってしまします。子どもが自分で自分がこうしたい、こう思っているとか、自分の気持ちを表明出来ること。人の意見を聞ける子にするには、大人が子どもに何か知識を注入するのではなく、自発的に遊び、自発的に行行動するのを見守ることです。A I 時代における子どもに必要な力を持つためには、見守る必要がある。去年O E C Dがエディケーション2030というのを発表した。今年から実施が始まっているが、去年1年生に入った子たちが2030年に社会に出る年。その時に活躍できるためには、小学校でどうするべきかを提案している。2030年だと、ちょうど去年の年長さんくらいだが、今の園児が社会に出たときにどんな社会になり、どんな力が求められるかを子どもたちにつけていかないといけない。大人が誘導することでは決して、身につかないものです。子どもは自分たちで何をするか、ドイツでは参画という方法を取っています。参加と参画があるが、参加は、誰かが決めたプログラムに加わること。参画は、プログラム自体をつくることです、遠足に参加するというのは、大人がどこに行くかを決めていくもの。ドイツでは、代表者が集まって3つくらい案を貼り出して、どこに行きたいかを投票し、行先を決める。前回もそうだったが、お集りをして、オープン保育なので、この部屋ではこんなことをしていますと話をします。その中で人気があるのが、園外保育で定員がある。「来週は木曜日にこういうところに行きます、希望者は名前を書いてください」と言う。お集りの時に、人数が少なくて他に行きたい子が手を挙げた。参加するといった子たちが一人ずつ連れてきて、誰を連れて行くかを決める。基本的に、子どもが加わっていくのが参画。A I 時代にどんなことが子どもに必要かです。大人が全てするのではなく、子どもが加わる一つがE Q (こころの知能指数)です。今回の指針でも言われている、非認知能力です。認知的な反対しているわけではなくて、タブレットで調べられるものは調べればいいが、粘り強さや意欲、興味、関心、協同する力は、タブレットでは出来ない。今の研究では、乳幼児期と思春期に来るそうです。ただし、思春期に来るのは、徒弟制度で来るといわれていて、徒弟制度が強い国では、引きこもりが少ないといわれていて、ドイツでは少ないそう。基本は、乳幼児期です。国が言う非認知能力を伸ばすことは、大人が子どもに教えるとかではないです。もう1つが大事だといわれているのがS Q。I QからE Q。そして、子ども同士の関わり。社会的知能指数がA I 時代にも必要な力で、これらをつけるのは乳幼児教育です。私たちは早くそちらに行かないといけない。これが「見守る」ということです。まだ整理できていないが、「見守る」の必要性がある。見学者に話をしたが、子どもの自由遊びも大切さ。大人が計画しない、子どもの中で生まれた自由遊びが、いかに大事かが最近は研究されている。指導計画を立てない、目的をつくらない遊びの大切さ。疑問に思ったのが、女の子がお姫さまごっこ遊び、男の子は戦いごっこは大事だと書いてあり、その時に、戦いごっこはいいか?を質問されたが、ここで書いている意味とは違う。全員が女王様になりたいといったら遊びが成立しない。いつも女王様になりたい、といっていたら仲間から外されてしまう。交代をします、女王様だったり、仕える人など役割を経験できる。

戦いっこもヒーローと悪者がいる。これも交代して、やっつける側、やられた側を体験するからいいといわれている。最近の戦いっこは、悪者とヒーローが対等に戦って、やっつけるまでやってしまうのが日本の戦いっこなので、立場の経験が出来るわけではない。私のブログに書いてあるが月光仮面っこがある、ということがあって、自由遊びの世界、大人の監視の中でない遊びの大切さが言われている。いくら監視しないといっても、危険が無いようになると、当然見守っていないといけない。一緒に遊ぶのではなくて、子どもの遊びを保障するために「見守る」観点が必要です。

—総括—

繰り返しになりますが、脳機能の拡大から言って、ニューロン・シナプス、刈り込み、いつでも手を出すことではない。手を出すことは逆効果でもあります。それから、脳機能の拡大するためには、子ども同士の関わり、大人が応答的であることが一つです。子ども集団が家庭、地域に無くなってしまっている。園は子ども集団を作り、どう助け合う子たちを作るかのための役割として保育者は見守ることが2つ目。3つ目はAⅠ時代にどの力が子どもに必要なのか。大人が知識を伝達するのではなく、非認知能力をつけること。それからソーシャルスキルという他人との関わる力をつけることが、AⅠ時代に子どもたちに必要な力を考えると、将来の子どもたちに対して、幼稚園や保育園とか乳幼児施設だと思います。家庭はなくてはならないと思っていますが、そこと違う役割を園が持たないといけない。かつて幼稚園は、小学校の代わりをしていましたことがあります。保育園は、家庭の代わりをしていましたがあるが、乳幼児期には何が必要なのか。きちんととした乳幼児教育を作っていくべき。何が大事なのかを作り、親が保育に欠ける・欠けないではなく、全ての親は欠けています。何故かといえば、家では子ども集団を持っていないからです。今回ドイツで、レーゲンスブルクという街へ行ったが、ドイツでも保育士不足で開園できないそうです。レーゲンスブルクは、ミュンヘンから離れた街だったが、ここに来て保育士不足が解消したそうです。それは、保育士の給料を上げたからだそうです。もう1つは無駄な書類を失くす。子ども主導の遊び、応答的な援助をすることを考えたときの書類に替えないといけないし、保育者の一部の考えを書いている児童票はなくさないと、それによって子どもに刷り込みを持ってしまう。要録を渡さない代わりに、小学校の先生が年長を教えるそうです。忙しい場合は、年長さんが小学校で授業を受けるそうです。学校の授業をするわけではないですが、私も早く日本が早くそういう方向に行くといいと思います。そのためには現場の力が大事です。皆さん子ども集団を持った中での実践が大事だと思いますので、いい実践をしていってほしいと思います。それが、これからの「見守る」の観点ですので、それを抑えたうえで、自分の園ではどうかを考えて欲しいと思います。「見守る」とは、どういうことかを話しましたので、違う切り口からでも、総合的に見えてくるといいと思います。最初の話はこれで終わります、ありがとうございました。

本稿は、2019年7月8日に行われた第50回保育環境セミナーの講演内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)



〒161-0023

東京都新宿区西新宿3-2-11 新宿三井ビルディング2号館10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、

QRコードからお願いします。